

---

## はじめに

中村靖子

名古屋大学大学院文学研究科 教育研究推進室長

今年度、教育研究推進室ではいくつかの変更がありました。これまで室長は副研究科長が務めることとなっていました。二名体制だった副研究科長が今年度から一名となったことを受けて、副研究科長の過剰負担を少しでも軽減するために、副研究科長以外の人が室長を務めることになりました。今年度私が室長の役目を仰せつかったのもそのためです。そして、できる限り若手の意見を取り入れようという方針の下に、室員は四十代の教員が主力となりました。副研究科長にはオブザーバーとして加わっていただいています。以上の構成で、一年間毎月会議を開催し、一つずつ問題を整理していくという作業を進めてきました。

今年度はまた、文学研究科附属「人類文化遺産テキスト学研究センター」が発足した年でもあります。これも昨年来の教育研究推進室会議での議論や検討を踏まえた結果が実を結んだものです。センター長である阿部泰郎教授のプロジェクトが今年度、科学研究費補助金基盤研究（S）に採択されたことは、研究科にとっても大変すばらしいことです。この間接経費の一部と文学研究科の予算とによって、大学院生が海外で開催される国際研究集会で成果発表をするための「海外渡航助成費」を創設しました。これによって、従来から推進してきた「フィールド実習調査」プロジェクトと並んで、大学院生のキャリアアップのための支援策がさらに充実することになります。今後は、新センターと、もうひとつの「アジアの中の日本文化」センターとを中継しつつ、これらと共同して研究科に貢献していくことが、教育研究推進室の大きな役割となっていくでしょう。

もちろん従来からの教育研究推進室の役割も継続して果たしてゆきます。今年度は、長年の懸念となっていたTAの採用の仕方、また活用の仕方について意見交換を行うべく、TAを多く使っておられる先生方に話題提供をお願いして、FD「TAの活用術」を開催しました。フィールドとか実験とかに限らず、文学研究科の研究分野にふさわしいTAの活用術について、大いに勉強となりました。こうした背景には、「TAはコピー係」といったイメージを払拭して、名古屋大学文学研究科でTAの経験があるということが、経歴として評価されるようにしたいという願いがありました。つまり今回のFDは、TAの経歴の実質化に向けて、教員の意識も学生の意識も変えていくための第一歩でした。このFDの記録は、本号にも掲載されていますが、特例として抜き刷りを作り、今後TAに採用される人たちに、教材として配布したいと考えています。学生の方でも、先生の雑用係という意識ではなく、自分のキャリアのためなのだという自覚を持って仕事をしてもらいたいと思います。このことは、フィールド実習調査についても、また来年度から試行される「海外渡航助成」についても同様です。

今年度は、国際化推進委員会の主導で、教育研究推進室と共催で留学生に関するFDも行いました。教育研究推進室ばかりが提案するのではなく、このように他の委員会から提案がなされれば一緒に協力していくことも、この教育研究推進室の役割の多様化を表していて、とても喜ばしいことだと思っています。

また、今年度は、研究者倫理が大きな話題となった一年でした。これを受けて、室員の一人である古尾谷知浩教授に、著作権に関するFDを行ってもらいました。著作権に関しては、分野ごとに意識の差があり、また年々厳しくなっていくこともあって、なかなか難しい問題となっています。しかし、院生がもし的確な手続きを怠るならば、結果は重大で、「知らなかった」で済まされる問題ではありません。これについては、研究科が事前に指導することが不可欠であり、そのための体制を整えることが喫緊の課題です。

いろいろ課題がある中で、その都度優先順位を考えつつ、取り組んでいかななくてはなりません。そのためには、室員以外からも提案する機会があるのがよいのではないかと考えています。これらは今後に向けて検討してゆきたいと考えています。